

# 第7回桃山学院大学図書館書評賞受賞作一覧

## 〔優秀書評賞〕

大山 夏奈（社会学部3年次生）

重松 清 『希望の地図:3.11 から始まる物語』 幻冬舎 2012年

## 〔佳作〕

柴田 大輝（経済学部3年次生）

マーラ・ヴィステンドール 『女性のいない社会:性比不均衡がもたらす恐怖のシナリオ』 講談社 2012年

三好 菜月（経済学部1年次生）

楊 逸

『金魚生活』 文藝春秋 2009年

## 〔総合講評〕

図書館長 経営学部教授 山本 順一

わたしたちがものを考える場合には、読書は不可欠です。科学技術が大いに進展した、この21世紀の世の中は、従来は通用したかに見える伝統的なものの見方、考え方、理論、学説がステレオタイプ化し、中途半端なイデオロギーのようなものに墮し、処方箋を提示していないように思われます。いままで以上に考えること、critical thinking が大切になっていることを確信しています。そのためには、しっかり大学の授業を理解する一方、デジタルの時代になっても、いままで以上にわたしたちは読書（電子書籍などデジタルコンテンツを含みます）に励む必要があります。ここでいう読書は必ずしも文学作品を意味するのではなく、理科読とか科学読み物という言葉がありますが、わたしたち教員が希望しているのは、本学は社会科学系の大学ですので、どちらかといえば人と社会を対象にしっかり考える読書を期待しています。

多くの大学において、大きな意義をもつ学生たちの読書習慣を振興するべく「書評賞」というコンテストを実施しています。本学もまた同様のイベントを実施するようになって、今回で7回目を迎えました。今回の応募は44名で、これは例年と比べてもそう変化がみられず、全学生の1パーセントにも満たない有様です。困ったものです。応募してくださった素晴らしい学生さ

んたちの作品のなかに剽窃がみられたことも残念なことでした。

‘A4判1枚程度に収めてください’ということですので、じっくりと考えた成果とはみなしにくいのですが、それなりに優れた視点、捉え方がうかがえる作品があり、わたしたち選者はそのような3つの作品を選びました。

結果は、今回も最優秀賞は該当なしで少し残念な思いをしています。優秀賞は、大山夏奈さんの「希望の地図:3.11 から始まる物語」をとりあげられた作品です。少し長くなりますが、直接審査にあられた教員の選評を引用させていただきます。「この書評は、物語が醸し出す全体的な‘雰囲気’がうまく表現されている。とりわけ、主人公である中学1年生の少年が有する意外なほど‘大人びた’観察眼について、書評の文面から感じ取ることができる点は秀逸である。また、ボランティア活動に参加しなかったこと(後悔)や、司書を目指していること(夢)など、評者の揺れ動く気持ちが物語のエピソードと絡み合っ、評者の未来に対する‘希望’を感じさせるものとなっている。この書評では、物語を引用して、‘希望’と‘絶望’が表裏一体であることを指摘しているが、この物語の真のテーマは、‘希望’という言葉そのものが有する意義(内容)であるように思われる(少年を潰したとされる‘期待’もまた、‘希望’の一部ではなかったのか)。その意味において、評者が取り上げている、エピローグの「石巻からの手紙」は、第二章で紹介されている「田村のエッセイ」と

の関係において(あるいは、一体のものとして)評する方が、よりの確かな書評になったのかもしれない」と述べられています。時宜に適した素材選びにも、優れたセンスがうかがえます。

佳作は2編を選びました。ひとつは柴田大輝さんの書かれた翻訳の「女性のいない世界: 性比不均衡がもたらす恐怖のシナリオ」についての書評です。このテーマに比較的近い研究をされてきた教員は、「たいへん難しいテーマの著作に取り組んだ姿勢は評価できます」と述べられています。特定の歴史的、社会経済的文脈から、男の子、女の子のいずれかの性別の子どもをほしがると地域や国々のありようが自然の性比を大きく歪ませている現実は、非婚、晩婚、少子化、セックスフル、セックスレスなどの先進諸国の状況と重ね合わせたとき、非常に重たいものとなります。アジア地域では、余剰男性と売買婚という看過できない現象を招いています。

いまひとつの佳作は三好菜月さんの「金魚生活」という芥川賞作家の楊逸の作品を対象とした書評です。中国籍の作家の日本語らしからぬ日本語の言い回し、中国人の感性が示された作品で、日本人の書いた文学作品に親しんだ読者にとっては新鮮だと思いますし、書評もこの作品の主人公の初老の婦人の想いを上手に論じているように思います。この書評が高く評価された理由も作品の選び方にあつたように感じます。

村上春樹や東野圭吾、太宰治や江戸川乱歩、有川浩まで、硬軟取り混ぜていろんなジャンルの文学作品を対象とした書評はあつたのですが、社会科学系の学部が主力のこの大学のイベントですので、経済や経営、行動科学に属する書物をとりあげたものが過半を占めていたのは当然かと思えます。

これからの社会を背負っていかねばならない学生さんたちには、他人の受け売りをするのではなく、自分のアタマのなかで知識をこしらえていただかなければなりません。財政にいささか陰りはみられ、資料選択に苦しさも伴っているのですが、附属図書館は学生さんたちに賢くならもらえる資料の充実に努めます。ひとりでも多くの学生さんたちに図書館を利用していただき、来年はもっと多くの応募があるように期待いたします。



#### 〔優秀書評賞〕

重松 清 『希望の地図: 3.11 から始まる物語』

大山 夏奈(社会学部3年次生)

東日本大震災から一年半が経った。私は、当時大学内で募集されていた被災地へのボランティア活動に参加しなかったことをずっと後悔している。だからせめて被災地の人々の“いま”をきちんと知りたいたいと思い、この本を読もうと思った。

震災前の幸せを懐かしむより、“震災後”のスタートに立ち、奮闘する人々がいる。震災から半年が経った頃、フリーライターとして東北各地を取材した重松清が、現地の人々の強さを描いたのが、この『希望の地図』という小説だ。登場するボランティアや被災地の方々は実在していて、小説ではその方々にライター・田村章(重松清のペンネーム)と不登校の中学一年生・光司が取材して回り、復興とは何か、希望とは何かを考えていく。

私たちが“東日本大震災”のことを知る方法は、テレビが一般的ではあるが、新聞、ネット、書籍などさまざまなものがある。しかし活字離れが深刻化している現代では、それらを最後まで読み切ることができる人は少ないだろう。その点『希望の地図』は実際の出来事を小説風に書いてあるので、読みにくさや退屈さを感じることなく読み切ることができた。また主人公が中学一年生の男の子である点も良い。例えば、彼は黙禱の際、薄目を開けて田村たちの顔を見た。頭では亡くなった人たちの死を悲しみ、冥福を祈るための黙禱だと分かっている、その姿は嘘っぽく感じてしまった。しかし津波により汚れてしまった写真を綺麗に洗って再生させる活動・写真救済プロジェクトへの取材に同行した彼は、写真に写る多くの笑顔を見ていくうちに、黙禱をきちんとしなかったことを後悔していく。黙禱はして当たり前という押しつけがましさ無く、自然と黙禱への考え方が変わっていく。主人公が少年であるからこそ、この誰もが感じたことのある心情を描くことができた。

不満は淡々としすぎている点である。田村と光司の会話部分は良いのだが、取材の場面では被災者との会話を中心ではなく、取材した内容を記述しているだけである。これは確かに場面の説明などでは分かりやすいが、光司の心情をもう少し織り交ぜながら書かれていた方が良かったように思う。また書名からも察することができるように、ここには“希望”しか書かれていない。小説の中で田村はこう言っている。「俺たちの取材は『希望の地図』という題名で連載してるわけだけど、それは『絶望の地図』と表裏一体なんだよな」。この言葉から被災地は絶望も感じているということが分かる。しかし、被災地の“いま”をきちんと知りたいたいと思っていた私にとっては、物足りなさを感じた点である。

南三陸町立図書館も津波で建物ごと蔵書を失ったが、全国から寄贈された図書によって十月には仮設図書館を開くことができた。その新館長になった及川さんに田村はこう訊ねた。図書館の再開よりも水産業の復興や被災者の今後の生活を考えるほうが先だと

いう思いはなかったのかと。正直に言うと私もそう思った。将来、司書になろうとしている私だが、生活が苦しい中で本など読もうと思うだろうか。もっと重要なことがあるのではないかと思った。しかし及川さんの言葉「産業復興や生活再建には時間がかかりますから、その間に気持ちが折れないようにするには文化活動が必要になる」を読んで、自分の考えの浅さに恥ずかしくなった。本というものは、人の感情を豊かにしたり、読み終わった後の達成感や面白い本に出会った時の高揚感を感じることで、明日も頑張ろうという気にさせてくれる。仮設図書館から幼い男の子が一冊の本を大事そうに抱えて出てくる場面で、私は、本は確かに希望になるのだと知った。

不満な点もあるが、被災地の人々の生活を知りたいと思っていた私にとっては総合的に有益な本であった。エピローグの「石巻からの手紙」は田村から光司への手紙であると同時に著者から読者、大人から子どもへの言葉だと感じさせられ、これから生きる若い世代にとくに読んで欲しいと思った。そして読む価値のある作品である。良い本に巡り合えたと思う。

震災があったこと、亡くなった人がいるということ、残された人がいるということ、その人たちの辛さや悲しみは消えないということなど、伝えるべきことはたくさんある。けれど、どう伝えればいいのか。今の私には分からない。だからせめて、この本を手にとってもらえれば、と私は希望する。



## 〔佳 作〕

マール・ヴィステンドール 『女性のいない社会：性比不均衡がもたらす恐怖のシナリオ』

柴田 大輝（経済学部3年次生）

近年、年上の男性と年下の女性が結婚するケースが増えてきている。いわゆる、年の差婚というものだ。この事例が今後増加していくことで、若い世代の男性によるパートナー探しが困難になるのではないかと考えていた。そんな中、より深刻な余剰男性増加の問題について触れた、一冊の本があることを知った。

とある中国の街にある幼稚園での園児達の人数構成が、明らかに男の子の方が多い、といったことがある。それは、妊娠中に超音波検査を受け、胎児が女

児とわかると中絶する親が増えたためである。この原因は、男女の産み分け技術が人間が手に入れてしまったこと、また、一人っ子政策の影響、さらには中国政府の圧力などにある。この圧力が相当卑劣なものであったことが、本書の一部で語られている。その根底には英米を中心とした国際機関の恐るべき人口抑制政策の存在もあり、問題は中国だけに限ったことではない。事実、インドやベトナム、韓国などでも急増しており、この数十年でアジアだけでも1億6300万人の女性がいなくなったとも言われている。

このように、女性が少なくなってくると、人身売買の世界が活気づく。余剰男性の増加している国のニーズに向けて、貧しい国では金になる女児を望むようになる。しかし、発展途上国の貧困層の人々は、中絶の技術がなかったり、また、それにあてる費用もない。そうすると、人口爆発に悩む国でも余剰男性が増加することに繋がる。こうして厄災は広がっていくこととなる。

そして、重視すべきは、この人身売買は決してローカルな問題ではないということ。実際に、他国から日本へ連れてこられ、違法入国に成功した後パスポートを奪われ、強制的に違法風俗店で働かされた女性を取材した報道番組を見たことがある。本書でもこれとよく似た事例を取り上げていたり、実話を元に構成されており、各部各章で具体例が挙げられているため、実態をイメージしやすく、この問題の深刻さがより伝わってくる内容となっている。

また、性比のアンバランスについてもローカルな問題では無いことを筆者は訴えている。中国とインドの人口を足しただけでも世界の総人口の3分の1に達する。この2国の偏った総出生数はすでに全世界の総出生性比をゆがめるほどだと。このくだりで、(原書での表現が適切だと仮定して、)少し翻訳が足りないんじゃないかと感じた箇所があったが、全体的に読みやすく、引き込まれる文章となっているのは間違い無い。

ほかに評価できる点は、レズビアンが多いと、余剰男性は更に増加し、こういった女性が、表面上、男性と結婚することは比較的容易となる等、同性愛者の、それぞれの立場における影響の有無などが挙げられていたり、また、そういった余剰男性の増加は、犯罪急増の原因となるなど、実データも踏まえた上で、様々な視点からこの問題をとらえているところにある。

経済発展を注視する学者、人口統計学者、そして親や医師。彼らの視点からの意見を取り入れ、現状を知ると、筆者はその歴史的背景をたどる。そこには人口抑制政策のための中絶推進や技術の発達のほか、無くすべき文化や風習までも存在していた。例えば持参金システムだ。娘の嫁入りの際に必要な、高額な持参金を免れられるのならと、産み分けを望む夫婦のあいだで、うまい具合に市場が形成されつつあるのだ。これらの問題を野放しにすることで、女性のいない世界が広がり、起こりうる最悪の未来を筆者は予測している。そのことに歯止めを効かすためにも、是非本書

を手にとって欲しい。そしてこの性比アンバランスという、かなり前から差し迫っているにも関わらず、ひたすら無視されてきた問題と、より多くの人に向き合ってもらいたい。こういった問題には、女性の方が興味を持つかも知れないが、男性にこそ読んで貰いたい本だと、そう感じた。私も、一男子として本書から感じるものがあり、これらの問題について深く考えさせられたことから、私は本書を支持する。

〔佳 作〕

楊 逸 『金魚生活』

三好 菜月（経済学部1年次生）

主人公の玉玲はレストランで働いていて、金魚の世話をしている。中国では、金魚は「ジンユ」と読み「金余」と発音が同じなので、縁起ものとして扱われている。玉玲は夫を亡くし、弱った金魚を持ち帰り、世話をすることが寂しさを紛らわせるための唯一の救いだった。あるとき、昔なじみの田舎者っぽくて無骨な周彬に結婚を申し込まれるが、無骨なゆえに結婚に踏み切れない。同棲中のときに、日本に渡った娘の出産のため東京に行く。そこで、娘に在留資格を得るために日本で再婚することを勧められる。娘に周彬のことを話せず、何度かお見合いをするが、なかなか踏み切りがつかない。同じアパートに住む女性と片言ながら会話を楽しむが、見知らぬ土地で暮らす何もない窮屈な日々。そんな自分を水槽で過ごす金魚の大宝と重ねる。最後にお見合いをした男性は中国の詩が好きで、片言に会話をしていくうちに中国が恋しくなり、帰ることを決心する。

外国人が書いた小説なので興味を持った。初めて中国人が書いた本を読んだが、若干文章が読みづらく感じた。主人公の玉玲の美しい容姿を他人と比較しながら書かれていた。たとえば、日本に渡るときに出会った森田という名の女性に「スタイルが似ている」と言われたときに、「玉玲のダブダブに余ってシートの横に広がるズボンから、何となく浮き彫りに見える細い脚と並んで、縫い目の糸が懸命に黒い生地を引っ張り合わせた黒いスカートにすっぽりとはまったコロコロとした太もも」と二人のスタイルを比較している。金魚の世話をして、夫を亡くした寂しさを紛らわせたり、日本での娘と孫との生活と中国にいる昔なじみの同棲相手と金魚と暮らす生活のどちらを選ぶかと悩む姿などはすごく身近に感じた。娘が出産直前まで働くことに呆れたり、日本と中国の猫の鳴きまねが違うことや、生魚を食べることに抵抗があるなど、自分の知らない

中国人の暮らしや感情、日本との文化の違いなどが書かれていて良かった。娘に同棲していることを言えず、周彬から電話で結婚することを娘に伝えてくれと催促され、板挟みで悩んだり、日本人でも中国人でも、仕事や恋愛に悩む姿に違いはないことを改めて感じることができた。主人公の最後の台詞の「チューゴク、キンギョ、キンギョウ、イマス」には主人公が中国においてきた大切なものに気付き、帰ることにした決意の表れだと思った。

人生とは、「選択」の連続である。結婚、就職、受験などの大きなものはもちろん、その日のコンビニ弁当、洋服など些細なものから、私たちの人生はつながり続けるのだと思う。玉玲は、周彬に結婚するか、日本で再婚して暮らすか、という大きな選択をあいまいに延ばし続け、それでも最後には周彬と結婚、帰国するという選択をした。無数のパラレルワールドがあるなかで、自分が最適だと選んだ人生の選択を、どれだけ自他ともに幸せであり続けることができるのか、玉玲のように、たくさん悩んで考えていければ良いと思う。

金魚生活では、玉玲が中国に帰る決意をしたところで終わっているが、玉玲が帰ったところからまた彼女の人生は始まっている。玉玲と周彬でどのような結婚生活を送るのか、周彬は娘に認められるのか、孫は無事に産まれることができるのか、続きが読みたくなる作品だと思う。

現在、日中関係は最悪と言ってもいいと思う。日本へのバッシングやデモなど、様々なことが起きているが、そこには、日本と中国との歴史の中で起きたことが原因である。『金魚生活』は、2009年に出た作品である。日中関係が悪い中、日本と中国がつながる作品がもっと増えれば、わずかな人たちでも、お互いの認識が変わるのではないか。同じ人間として、悩み、苦しむ姿は同じだ。領土問題など対立している中国であり、文化や歴史は違うが、同じ人間として仲良くしていければと思う。

